



校正小史錄卷之四 前篇

曾 5
234
4

A vertical ruler scale with markings every 1 cm. The numbers 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, and 100 are highlighted in red. An arrow points to the 100 mark.

北窓瑣談卷之四

梅華仙史擣春暉著

一葛茅羽衣瓦の頂ををして臺草の縛ふる皆なりふ巻をの
天地乃より其の任をれど左毛あり。是も日夜天の左旋をの
ゆゑ乎天乃より門をくたりふまよあり

一松永矣徳の著述乃ちに戴恩他とり。何事く。反徳生涯恩
義を蒙り。又載らし。うとど。余りまことを書く残るべし。

今書の主意今附乃風と遠い古人徳り。又義難有ひむ
へあり

一大坂天王寺六時堂の前乃鐘ハ聖徳太子の舊物とて真乃黃

曾 5
234
4



鐘律ありといふと兼好か徒然草か云ふより今ふるを世の
人皆名鐘ありと思つ。余も往年天王寺ふるをもみを笑
ひすむ律莫鐘は假も素もを依り世間普通尋常の鐘乃
如し。形も又二三百年前より古物と云ふ。憐しき。寺傳
小間小太ふ侍東の古鐘ありといふ。怪怪しく坐樂人小間か
多ふ律も莫鐘か云ふと云。余ひそにて思ふ。小太ふ傳東の古
鐘もむろ。後失して。後後音律残。妙なる人乃
外乃經歲々々補ひ。あまねく。傍侍乃古鐘なりといふ
。けすり廢物の一つある。然失く。つらむりかういと。傍
多く人を経ふ。但莫鐘の古鐘乃失く。も惜たるの恨
りいし。虚妄いふあややりよ。

あり。今後年每く浪華の古事。多く知きる人少す。ふと
乃鐘も二百年。あ。茲五郎右衛門と云。繕物。ひ。新ふ繕て六
時堂の前ふ掛。もふありとぞ。其茲五郎右衛門と云人。ハ系和
の大佛殿乃鐘を。縛る人少く。官。三十人。扶持を賜。里
人。お繕。もく。擇列姫路に。多。家。有。と。ど。又。徒然草。小出。家
淨金剛院乃鐘。今。洛西乃妙幻寺。少。と。笑。て。奉。に。此鐘を
撞。時。も。寺。ふ。凶事。一。ゆ。と。て。古。藏。中。ふ。納。寺。小。近。東。草。見。の。信
也。何。糸。も。る。も。や。何。く。と。く。又。出。と。撞。た。す。し。小。打。悪。く
凶。す。所。を。一。山。あ。ま。で。今。主。と。ち。又。去。藏。中。ふ。保。く。納。り。
り。い。し。虚。妄。い。ふ。あ。や。や。り。よ。

一集外歌仙々狩野蓮長小金せられ國画を添へきたりとぞ

峯 嵩

竈

平常縁

千葉从常亂六男
東六郎亂頼末

立の山野烟たまは炭窓だよもりやうのちく高

殘 春

津守國豊

任吉社敷
信長時代人名

山月入簾

淨通尼

光隆院殿後室

秋乃夜の露れ玉の露をあみそむく顔りのち山端乃月

春 脫言

宗 長

後柏原院御宇
連哥師

ま柳のあいへ残人乃多々道ある脚代のちゆそも周先

寄舟恩

宗 碩

連歌師

まうり移り水流しゆる風ひくよもかく無む事しつれあき

月 前 厂

宗 因

能登

を初うき井の厚け草よりも聲るありゆる月内絶りな

暁 雪

正 徹

徹書記
招月庵

ふ聲の雪井もううてを消くおのふねうかげあけわに

物 逢 恵

正 廣

世日須正廣ト云

物簞の舟よひとくや月内えめんし月夜の袖うなづく行船く

一夜在

游 捕 衣

兼 裁

猪苗氏
仙臺連哥師

秋深くあ秋尾乃浦北滿士人もちかく御衣とやうすき草

冬 郡

道 灌

太田

かく衣もとせ乃草の花房布乃くしきもむけもあり枯ふ夕里

寒 苔 風

長 康

三好修理太夫

雞は風入にふるう毛とえくあり枯葉の落そとむ夕里

旅 篷 疏

宗 養

連哥師

風す柳よあれだもしる筆毛もむくぬ旅宿

園 雪

政 宗

伊達中納言

竹^{イサ}をもとより誰のん哉えん違坂のまかたうはむ後よのゆき

梅毛留袖

兼 与

猪苗氏
兼裁ノ子

絆袖小白いをぬきく散のく赤色毛もむくむ夜乃梅枝

遠 村 鶴

玄 陳

里村
花下先祖

毛もくうふゆのはけもん奉毛とく毛里にむくうむくまし

待 花

昌 俊

佐川田喜六

梅^{メイ}の花すほひそひ新あ

紹 巴

連哥師

佛名夕

宗 牧

連哥師

ま終み秋の時よりあくすを室とみせぬ多き来ふ夕里

田 無

玄 肩 細川

さくらふすく小向す簇も無う事の遠きかうとも慕ひてや笑

行路時雨

幻 前 連歌師

かづりそよ行叶山風吹くよりやまく晴て乃雨イ道いそく

柳

元 就 毛利太膳太夫

喜御の糸くらきそもの糸くらわう小年巻く初むる年

岡 居

氏 康

北條左京太夫

中／＼ふ清めぬ庭も塵もあ／風はほりも顔山の下塵

松 間 花

膳 信

武田太膳太夫

立並木のそよあれ山はくら松か千年の色をあくまく

寄 松祝

氏 政 北条

すれ給君ふらり禮を経て松か千年の萬代乃と原

山家初冬

尚 燉

惣社坂本

山猿乃頬けの煙すらすま時雨／空に冬を東み冬

月風徳車

長 哀

東山若狭少将

世の人の月の徳

宗 德

連歌師

陰又浮すくゆすく御室乃戸成徳の雨か／と月乃城か／と

月前述懷

心 敏

僧都連歌師

まくらのゆゆく處もち身をすくとすと見えゆ月乃南

萩奉琴音

基 佐

福井越前

湖の邊を走る
月有遠恨

肖 拍

牡丹花

おとめの様に人の聲を打ぬ
山家絃

親 當

疊川新左衛門

喜くこそ人情事もあれどもかくらへて家計より大
暁神樂

冬 康

安宅樺津守

うふ夜の曉ゆる聲
河五月面

氏 真

今川

うせ川歌くろちくは岩を多く梢りかかる五月面乃ち
寄 桂風

昌 雄

里村

あむれとよしとよすあれを一も多し人ふせん小夜の桂

江邊寒月

政 一

小堀遠石

う努えてよせある波の聲をかへ水入る乃ち此夜寒月
月

矢 徒

松永

喜と又とを育乃因ひかく歸しようや吉野の楓すりとも

一 横車肥後守所藏の信西入道の眞跡乃舞樂乃圓の毫物乃
写しえり。乐曲數多あり。至半分合掌とく吟詠する墨を以て小
今づく輕小正直のへぬてぞ斜にそむきて吹く。是古昔八

笙の吹すと思ふ。又笙樂が近く吹曲すを舞の姿
云軍勢にて今乃信間がある。太神樂。獅子舞。手拍。輕業
せよじを多し。雅樂ハ古代の物多く殊の唐土より
まく。今乃ト彰雅舞すもハ世俗の淫樂とハ格ぶの
物多く天地肩壤の邊にありて人皆思ひ居れども人
情も古今同しものか。至舞ゆ今乃俗人の情すも
すり立つる所也とたう

一京都ニ奉通下立賣小姫ひめを賣うながす老翁おきなあり吉久よしひさより寛政八年
丙辰みづと十歳と壯健さうけんなり。經治けいじノ職むらをもと勤め毎日
自ま小姫ひめを経方に歩く賣うながす也よ。健けんなり。故一京殿だい下げ

鉄石てつせき軒あより小號こごうを賜うながふ。外玉侯とき貴人きじん争あひて壽こと乃家承
と成去なまくの後のち小姫ひめをル老翁おきな。經けいの鉄石軒てつせきあより
経けい一賣うなが。至いた九十七歲と亦また壯健さうけんなり。更また婦めより山上行
數十年いくの事ことを保ほつて死死。而て即そくて死死ある

一寶永年間

大納言殿だいのうげんハ管絃くわんげん乃達人たつじんあるしが。號ごう又小笙
笙さう乃塔能たとうもくむせし。御同列ごどうれつの御家ごけニ延喜えんき御物ごものの名聞めいもん也
巖いわと之の小笙昔むかし持もつ候まつ。御家ごけニ延喜えんき御物ごものの名聞めいもん也
高たかきひく彈ひきし候まつ。小こ一いち室しつ成な候まつ。暫時とき備そなへて
候まつ。然作つくられ。彼かれ卿きみ亦また持もつ候まつ。祥頌じょうのう乃高家たかけ之の名
林はや候まつ。侍しふ。重寶じゆぼう門外もんがいも出でまわまわを。影かげも隨つづひなし。卿きみ

もろくちゆくゆき。旅のゆか。持て琵琶のゆりへおき
 て北野乃船。まつゆき。往蹟。まつ日奈。にて何とぞ。被琵琶を
 聞しゆる。借りほしくて。承認。まつ小舟。風吹。ゆり雨降。り。春
 まつ。候。た人の供人。まつ召連。たゞ。むすふ往蹟。にて。敵
 月。あま。まづ。まづ。町家。まつ。いと物。難。めん。人。まつ。おは
 まつ。かう。往。ぬ。彼卿。此。す。を。傳。へ。まづ。始。の。絶。ち。繩。と。も。出
 と。と。居。まづ。しが。後。ハ。ゆく。感。ゆく。旅。ひ。まづ。かう。殊。務。の。す
 あり。わざ。小。拵。ひ。今。の。借。で。至。到。と。く。今。拠。た。まづ
 まづ。の。車。坐。する。御。志。の。難。まづ。彼。琵。琶。借。一。進。まづ。し
 まづ。と。人。まづ。旅。ひ。まづ。と。宣。ひ。氣。び。今。と。持。まづ。まづ。

六、明日。まづ。今。と。出。まづ。と。御。衣。の。袖。ア。上。ア
 抱。まづ。を。海。り。旅。ひ。ぬ。まづ。後。彼。脚。家。ア。主。寝。ア。名。筆。を。皆
 み。代。ア。と。と。彼。毫。ア。贈。り。借。ア。ひ。一。ふ。寢。永。の。大。茅。ア。彼。事。の
 玉。藏。燒。矢。ア。彼。筆。ア。贈。ぬ。既。琶。ア。代。ア。筆。ア。セ。め。れ。も。う
 た。で。も。久。を。重。た。年。ア。と。今。よ。巖。の。琵。琶。ア。彼。脚。家。ア。侍。リ。ま
 て。卿。常。小。舟。ア。放。ま。ぞ。愛。し。居。ま。い。と。ど。大。天。の。時。ア。ま。づ。拵
 ま。づ。か。い。ほ。う。み。ぞ。稀。代。の。名。置。今。ふ。存。在。せ。り。今。教。寺。人。ゆ
 一。下。サ。小。鳥。山。の。辺。マ。雷。默。ア。と。り。よ。お。行。ま。す。空。氣。ア。太。き。聴。ア
 大。あ。ア。四。三。れ。瓦。を。続。ア。裏。ア。夏。ア。以。近。の。山。傍。方。ア。自。然。不。完。ア。

を完す。又雷獸首を乞ひ、金を以て奉る。又乃て玄龜の來る
時、山中より默の事あるがれをもと、舞うが爲た事あるを雷獸能
り受け、舞うがれをもと、忽ち玄中へ入る。まばらによ
玄中に入るを必雷鳴ありありびび。唯雷小鳴ると云候。
又玄に近づくハ寒の日雪を乞ひ、雷獸を獵するあり。何處
とりふ。古事記は、かく云々を作らん。山烟小芋
を移る。又かく雷獸芋種を塙に喰ふ。山芋の如く而
姓ゆき。獨りよどて、星漢上の書ふる雷風と呼りと摩雨

一
亦虫

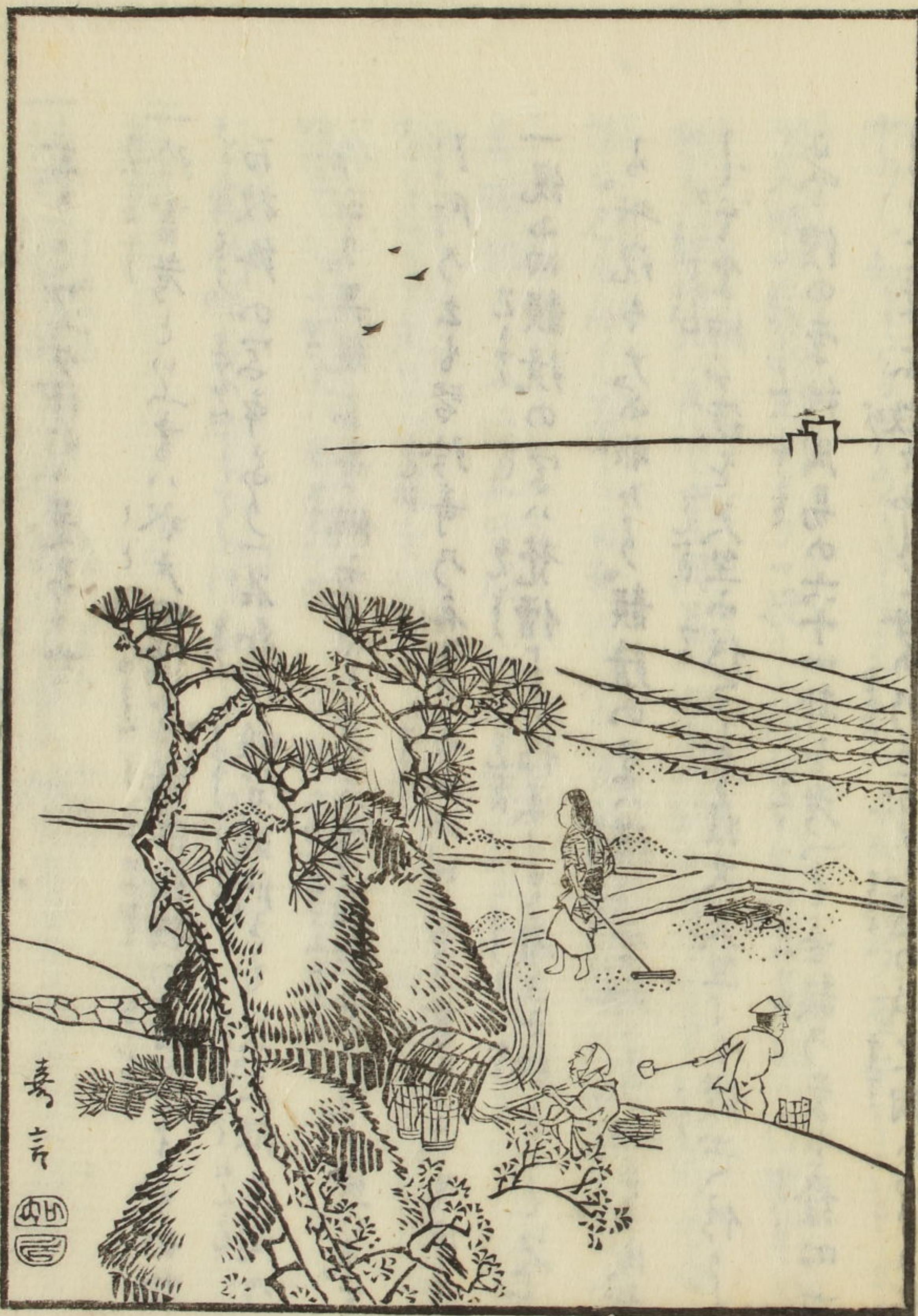
大海中小魚也。水淺也。齊妙。

ト
林ノシマニ海潮を多石アリ。潮モ小海アリ忽ち水清アリトキテ
潮乃シ小限アリ。源水アリ。船アリ。水底石多く。海底ト時々差
時潔白乃清也トキテ。日本有レ。佐豆國三嶋ヨリ。水少候
石アリ。ト。そは是御事多ニ神主三本。併ニ。三嶋ニ。縁家アリ
て一尺余の水底石成三嶋ト。ナ。水の上段か。窪處也。至
多中ニ。潮也。酒少く。船也。モ。少く。四万石アリ。アリ也。ナ
清アリ。因アリ。或紙。少。水。少。無。也。ナ
ト。ナ。中。數。牛。の。水。底。石。也。少。急。用。立。ゴ。レ。ト。伴
良子也。ナ。足。及。バ。ナ。ト。悟。ア。也。

一
仇野山陰

あはうのまゝ、うら
波路は褐良とく所の暮農
を東に

當ふ遊ひしよの所アリ。木家乃庭すく塙を焼ケバ
 は河原ふ汝庵といふやうと引シテ星ありと仰
 せり。漬をすゝみをあはり。漬を漬サ時小豆沙乃上
 み漬成波入るにちかのれきもとあみ。茎葉とく前猿サカとま巻
 く物をうち物をあく。土上に漬を波入すとあく。茎葉
 編ハタツ物を汝庵とりふありとめたり。波入と方言遣ふと
 あれむ化の園玉タマノコトハ如け物を汝庵といふやあくとと語アレ
 壱洋主アキノヨシナ天野信景著述の書乃名を汝庵と名付へと書
 の最初に汝庵の縦横カタチを多くてを縦ハジのある縦ふ。余
 いよど汝庵ノ初巻をアキ。常ふ人の竟カタチ。雷盈のみをあら



おうとりよりばれう是あるや

一珍書考とりふ書ハ水戸の儒官猪綱信興の著述。す。物而放舛の字率あり。一名和漢雜文。或同ともりふ。元錄卷間乃作あり。其後ふ寄僻か多くハ幸強附會の説と曰ふ。至引所乃云も皆珍奇乃名ふ世間みほくする書なり。中井乃一説ふ曰韻鏡の学ハ梵僧より傳來して唐土ふ興きり。ど小。此説も大に非なり。韻鏡の学ハ漢乃李紳より始まる。成爲し。李紳が説を天竺ふ傳く。後は又天竺より唐土へ傳りし。漢の李紳周易の六十四卦を考て音韻乃學を發明せし。今李紳を微々としてせむ。行乞がく。遙の後宋朝ふりて

あり。之を考る者五人。とく此説を印板。唐本。うりけ。余が文明の舞水先生より口授し。終ひ。此説を又余り傳授せられたり。韻鏡ハ反し。周易の六十四卦を多う。下。無人あり。合せ。多く。上。無し。かく。日本本乃人を夏。多。知。大秘説あり。とく。吾深。按。多。近來。皆川先生音韻の学を唱へ。易の六十四卦を。多く。文字の義を解し。音を考。とり。皆川。彼秘説を。生。多。又。自己。考。登。多。唐。多。書。傳。多。漢代。多。を。舞。水。明。あ。ふ。事。多。傳。東。せ。う。と。り。よ。奇。か。て。信。じ。う。と。よ。を。舞。水。明。あ。ふ。事。多。傳。東。せ。う。と。り。よ。奇。か。て。信。じ。う。と。よ。

一江別多賀社より三里程ノ山奥ふ洞穴あり。多穴のゆふ。猪乳石

多く産せり山田の浦ノ人木内古盤其完か遊金ノ事
 一スランガスティニと云石も蠻物と云 蠻人乎々（捺波）
 腹（おもて）の脛物（つま）に潰（つぶ）ひ出（は）はる石を瘡（うずき）小尚（こわざ）いとく腹
 けを吸（く）ふ腹（おもて）を石（いし）水（みず）に石（いし）放（はな）水（みず）に入（い）れ
 吸（く）ふ腹（おもて）を（く）くあ（あ）ゆ（ゆ）吐（ぬ）か（か）く。多（多く）は石（いし）残（のこ）り金
 宝（たから）用（もち）ふ脛物（つま）の猪（いのし）を吸（く）ふ事（こと）ジトウザ（シトウザ）の勝（まさ）りとぞ
 石（いし）色（いろ）と黒（くろ）く光（ひかる）く脚（くび）伸（の）ば（の）く眼（まなこ）あ（あ）く近（ちか）く
 手（て）付（つ）むハ眞（まこと）物（もの）も劣（ひど）く経（へ）り。如意道人（ゆめのみちじん）が遊（あそ）ぶ
 和（わ）香（こう）小（こ）け石（いし）を（く）く一（ひと）塊（塊）を拾（あつ）ひ余（あま）る猪（いのし）を（く）く。遠（とほ）
 川（かわ）ノ近（ちか）在（あ）サイゴウ村（むら）（シ）イシタ（いし）を（く）く比（ひ）乃（の）方言（ごん）
 古付石（きときし）と云（い）ふ。石（いし）の色（いろ）を（あ）わ（あ）せ（せ）て。形（かたち）を大（おほ）く
 番（ばん）產（うぶ）ふ事（こと）あり

一誠前（まへ）久敷賀（くしが）原（はら）仁（じん）右（う）傳（つた）ひ。余（の）り今年（こととし）格（かた）ふ意（の）人（ひと）
 世人（じんじん）用（もち）ふ事（こと）あり。數月（いくよ）急（いそ）ぐ登（の）り。西（にし）山（さん）又（また）ある。あやうい。
 妻（めおと）ふ代（だい）とつもう二（ふた）歳（とし）かある。岩（いわ）胎（たい）と云（い）ふ。小（こ）心（こころ）を喜（うれ）し
 一人（ひと）石（いし）を（く）く。古（い）く。旅（たび）のあ（あ）す（す）ひ。外（ほか）の男（おとこ）を（く）く。残（のこ）り石（いし）
 海（うみ）とて又（また）一人（ひと）廿（たそ）七（しち）才（さい）糾（くわ）あ（あ）す。下（しも）婢（めい）を（く）く。彼（かれ）の下（しも）女（めい）のあ（あ）ふ（ふ）う（う）ひた
 亂（らん）世（せい）。妻（めおと）も周（まわ）りて。拘（くわ）病（びょう）の疾（め）強（たけ）た。下（しも）女（めい）のあ（あ）ふ（ふ）う（う）ひた
 あ（あ）すと四（よ）つ（よ）つ。枕（まくら）を（く）く。有（あ）ゆ（ゆ）明（あけ）の聲（こゑ）大（おほ）く。消（きさ）く。少（すくな）い。少（すくな）い。少（すくな）い。

懷ふ抱あらま記せよ。延とうち至明の姫大を薦す。下かがりよ
と源次の間々障子戸用たまふ。下かがりの小屏風のより
何うしたまひか。アえなし。何せんと云ひて姫大をうち向
ぞうに下女が肩引結髪のやう。屏風の下ふ引添へ一處で
屏風へ登り付て下女も登り付て。屏風の書も下女も
膽消魂散く氣絶りも無く。足一歩を抱て下女も屏風へ
下女を思ひ。在り手に小刀取て。手ふ至明の姫大をもげて
を修ふ居を。物も云ひて至るが。彼女毎夜屏風へ登り
足付て。屏風へはり下女屏風戻れ。肉ふ入る。又下女
多たれ。下女を尋ね。妻ハ下女爲め起し。是を一てを修む

小障子引手て又我國小入と夜御と用ひ合ひ。扇と
を引被れ。夜を林す。里方の大坂を方へ。人へ。急
小只の長扇を。呼び。もの。の。をかく。何と。かく。化の。よ
おもひ。かふい。はす。下女仁左衛つ。あひ。中。や。そ。
事あく。近町の者。かく。世上の。併縁を思ふ。く。は。ゆ
私して。一人。初。う。居。下女。世上の。併縁を思ふ。く。は。ゆ
下女。一。か。事。ま。ほ。は。ど。余。多。年。新。し。を。下。ゆ。れ。み。一
物事。一。か。事。ま。ほ。は。ど。余。多。年。新。し。を。下。ゆ。れ。み。一
翁。も。い。と。奇。怪。乃。よ。か。う。多。余。些。す。を。修。ふ。は。ぐ。考。ふ。

姫姫ひめひめとおとおと病びやくの生うつしるをあふべ。疫えき多おほれ人ひと
 阳氣ようき頭かぶ上あふこまざこまざ。氣形きぎょうを結むすんで首くびより上あふゆゆあふ
 し。人の寐ねぐるをそぞる眞まことの首くびを修なめよ。小こ寐ねくみ登のぼ
 し。離魂病りこんびの顔がほあるよし。彼下か女め厚こづ肉にく小こ寐ねくみ登のぼ
 小こで、首くびに付つけや。争あらわせや。と書か女め語ごいた
 一實政じつせい章しよう臘月ろうげつ戸下とげ谷だにの大至おおご久居くゐ侯こう乃の臣しん福地ふぢ三さんをま
 おお勤こまここ小こまほ。官くわん「う侯こうへ達たつせり。三さんをま義ぎ
 け頃うき火ひ矢や比ひ頭とうああ勤こまた。清きよは數かず所ところをえり。破は丈じやう里り輕き
 乃の引ひき廻まわ。方かた仰あお望むね。上う國くに小こ達たつし。奇き特とく小こ回まわし。石いし乃の功ご
 同おな主ぬし人ひとより。被は裏さかそそし。並ながめめ。珠じゅ小こ微び妙めう乃の陪ばい臣ひん乃の功ご

キモケ移うつ小賞こしょうせせ。士氣しきを勵あます。の兼まべ。五ごど

た御ご代だいああた

一元いっげんの御家ごけ可こ。榮筆えいひの精せいと。朱文しゆもん公家こうけ禮れいの性せいをそそ。

此君しきみ一いっ節せつ瑩無瑕えいむか夜聽やき松風まつかぜ。漱玉華萬縷しょくこくは鳳鳴蟹眼ほうめい蟹眼

羊瓶龍雪起龍牙とうげ

一寛政四年かんせい四年壬子二月肥ひ小雲仙嶽こくもんせんだけ大小火燐おほちんちん。數日地震じしん夥たぐいし。同四月朔日しやくじつの夜成せい剝過はく玉云仙嶽ぎょくうんせんだけの下下乃前山まへ。之之鳴原城なるはらじょう乃上あふ山さん。二ふた所ところ破はき大おも。同とも所ところ鳴原海なるはらかい中なか。大燃おおや山さん。洋浪山えいろうさんののトト。唐とう上あり。島原城下しまばらじょうの町まち。外修原須ほかしょはらす乃材木。佐嘉領さかりょうの南海なんかい。條じょう免めん。材木肥後ひご西面せいめん。

隠れ多村。天草嶋の海濱も仰る民屋皆同時に小没溺し。嶋
至る死亡の人凡三萬餘。肥後少くも二万餘人とり至る。外
備少皆それ小準じて數十人死亡あり。其後浦中少少を嶋
七八十も出現したと云去年勧用はり雲仙嶽に鷹し
て喜ぶ事多也。其後かゆち地冲より火乃山出或ひ大
柱あるのみまる。毎度あまとぞ。二月以降九列松本地
震ふ。肥前も而て一月内四回六度震ひ。す
ル五々々々。四月頃日大破り時既ハ嶋原の地。熱レ草履そ
も止む。かくかくカケラゲ。峰山破き大かしとぞ。至前小嶋
東近辺の草木一夜のうちに何ものかも焼小花崗。され人皆死物

本邦へ征かれた安永己亥の冬十月朔日より薩摩平野橋嶋山
大小燃え。十月十日少く佐野勢尾張志摩參河道をくもを灰津
たる。今後天正年中小信列窓同窓大ふ燃。又とくま乃雲仙嶽
たり。橋嶋山ノ時ハ大隅の海中一小新嶋七つ出現せり。余も親
しく見及べ。海中津浪を多度のくくとくとくとく。但大燃め
後數日一々山上より大水漲りありをも爾乃民家皆流去死
亡乃人多き多矣。濠間山大燃の後も数日して山中より波
水大小張り利根川を押す。もと本江戸近くも佐野勢衝ど
き多大船數十艘。間人民の死亡數万人不及。濠間山ノ燃る者
衆都逃れ等え。唐古ゆくも山崩き門岡をハ凶事と云ひ

ノレぬるふ。あは新ふ嶺く伐湯ちせるよハふの増すゝも言
しれ。至年去仙嶽破きく候。地下の蔚陽ちふ癡達せしと
モ。夏小姑王氣候多々頃少く五穀り豐熟。近年に及ぶ
猛なり。氣候和順ある故。や脚氣中暑下利等の病多く。人
民健固。例々夏小姑や。れぢ左凶禍福。お陰。物多く
九列の五七絶ハ天下多く有余。多きゆで造化のみあり不可
思儀。アキナリ

一肥後玉山。小方言トウタウと。草。煙。乃。葉。似。アミ。
毒草。アキナリ是。紙食。エ。卷。狂。二日。絆。モ。タモ。ト。アキナリ
と。アキナリ。

一近在。山。小方言トウタウと。草。煙。乃。葉。似。アミ。
○。アキナリ小魚道奥の大河。アキナリ。族。アキナリ。作。アキナリ。修。アキナリ。
草。付。アキナリ。火。アキナリ。アキナリ。乾。アキナリ。水。筋。アキナリ。走。アキナリ。多。アキナリ。
て。警。時。アキナリ。何。アキナリ。少。アキナリ。形。アキナリ。有。アキナリ。金。鍔。アキナリ。大。アキナリ。五。アキナリ。小。成。
も。アキナリ。又。雜。の。生。アキナリ。彼。葉。成。付。アキナリ。少。アキナリ。完。成。穿。アキナリ。
針。アキナリ。を。彼。穴。アキナリ。通。アキナリ。め。アキナリ。も。アキナリ。細。アキナリ。土。アキナリ。絕。アキナリ。を。アキナリ。有。アキナリ。水。筋。アキナリ。置。物。
小。形。物。アキナリ。印。章。アキナリ。形。刻。ム。の。アキナリ。か。アキナリ。有。アキナリ。鹿。四。嶺。
乃。增。用。玉。波。昂。アキナリ。と。アキナリ。河。承。十。左。集。つ。緒。アキナリ。

一賛。葉。經。ハ

公儀。脚。製。禁。の。アキナリ。好。猾。の。アキナリ。人。アキナリ。

價貴た某種の贋作偽造の物多し。近く人參熊膽テリ
アカヲクリカンキリの類。贋物あつまひ稀ナリ。人皆病危き
乃時ふ當るゝハ家を破るゝも全を出し。是等乃素を買
ふ多く用ふ。眞物あつまれば何の事なし。家をも破
り余處もあらず。家ふりぬけ乃もアリ。某種を偽造者も
情むかた第一なり。多かの書画古墨物の類を偽作。人
が欺くハ。あれどと云あつて。唯觀毒力物多く人の目を
悦びも身を坐すとやれど。眞不通り。似てはゆきを愛作
ゆくも妨げない。ぞ思ふ。

一云名丹下系陽。过何某助生。至何某成初。指丸。少人。

路次ふのう約今かあちわが身。早鐘たゞぐくせうて東西に奔
ちがひ人數しきよ加列をゑへ立入り。附空氣ハ所司代、鎧ひ
や。那事の時も兩人すくにすけ付をれあむれど。ひそゝ小威
えりきむ、もひるく丹下か近づ封面。ひまみの金子も金と侍小。御金
不直人出来ば。絆りふ様よく最早ひまぢく物ある。物を
やまと國へども、初の招徳乃よもあも失禮。恃み主人を
やめだす。一刻もすく封面。辞しきをと。一刻のそよ千
トモゆる知れ。林房ふ。御多々主人ふぞう上主のそとをと
や余用。もまき。兩人共く立向じ。更に一れど。役今日ハ幼
くあ君を。情たましに。おあしくぞうり少佐はまくふすえ

ト。雨衣のう用あるすも難儀り居り。多ふ人へとあ君
御宿所ア奉否を尋ね。又入大ツ寝衣束を揚ぐ只今年代中
ある事。申し入。まみり。脚服織笠。用意。御两家
ト。小年代。底申。教ふ。四方の。去國。少く。有り。參
まき。握り飯を。纏。玄室。走りぬ。残。小。日
急處の。子。也。柔の。湯。又の。日。入。申。今日ハ。玄室。而て
袴束。終。是。御。御。玄室。ハ。経。近。之。也。東。北。西。麻
上下。少く。取急。往來。終。ハ。足苦。し。る。毎。日。ハ。生。る。
御用。も。遼。小。多。申。矣。か。今。も。之。ナ。セ。ア。リ。ト。ク。
入。ぬ。壬。兩。人。の。姓。シ。ソ。イ。方。ア。教。の。ド。ル。ト。化。ア。人。ト。

ト。つら早。レ。申。矣。モ。申。ア。レ。也。兩人。モ。不。丹。下。ノ。柔。子。の。功
者。ナ。モ。成。修。才。感。一。語。リ。合。タ。レ。子。を。追。来。速。水。宗。達。洋
ノ。丹。下。ハ。柔。子。の。名。幼。は。人。ア。リ。ダ。カ。か。ア。リ。モ。ハ。速
小。出。速。ノ。而。イ。入。ト。ハ。モ。折。惡。忍。大。ア。シ。所。ア。リ。皆。公。私。の
所。ア。リ。モ。ア。シ。を。取。ア。リ。ト。モ。情。遠。重。ア。リ。カ。ア。リ。終。ハ。柔。子。
又。の。日。ア。入。ハ。勿。シ。ト。告。ア。入。ハ。勿。シ。ト。已。が。智。計。作。略。を。人。不。仁。ア。シ
ト。人。を。休。ア。ハ。セ。ア。幾。許。ア。幸。若。伏。ア。ト。ア。不。仁。ア。シ
ア。イ。柔。道。の。主。意。ハ。大。小。主。意。ア。シ。ト。云。ア。道。不。近。ア。詳。列。主。

一。伶。人。時。え。ア。物。倍。小。武。吉。ア。件。小。御。女。吉。參。主。祭。主。祭。主。祭。

賣多矣。武吉を價を取る。物をとる。唯其筆手行ふ人承賜
ノ事あつと。亦假せり。武吉縫ニ足をあへて筆を穿く
はりとアラニ筆の筆取りし。價を増し加へて彼女
成峰と云ふ女筆者返しと云ふ。如何と余成恨り返多
を。すくなくして返し。女恨り上崩ハ思ひ返しハアシム
キトクル事。武吉等々反る小ハアシム。筆乃にアシム良
事も價を擅る。今三足成様よりぬ女筆者アリ。故
筆小吉を付く。嘗試する。及び筆名筆取り。後少。上乃
御物となり。伊リ今多院小西。はるを豊原統秋。體源
抄小載。レリ。末代小吉。此人の筆氣なり。今乃世小ハアシム
物を。やまと。買ふ。我多名ふり。悦び頗る。大抵。唯
小世小河。利潤を大切なる。自然衣食の額も今
不聞。又小河。りん。多も公あらず。はるを。草花。あらず
多歎。かく御人。あふ。かく。云合。欲。御。たまふ
若しき。はるを。かく。御。小執。其人の公。多。かく。あらず
。代。ま。も。傳。上。脚。物。も。ふ。かく。主。寔。とい。も。是
頃。代。ふ。筆。人。不。知。筆。小。賣。筆。大。と。以。を。言。消
。多。物。代。ふ。筆。人。不。知。筆。小。賣。筆。大。と。以。を。言。消
。婦。一。賜。い。も。人。云。う。周。其。人。あり。世。小。筆。人。を
どり。我。始。が。り。人。に。ア。リ。筆。小。箇。筆。も。

とふハ竹の價のあはげても毎年物にて。筆を奉りのつゝを
上中トアふにて世ふ事も實もぞうめんから。誂は勝きくふ
物を實とうく家のま室ふとゆたはる名あり。イチメの御
ノリノレ價を限らず引出物を小吉備（ひよし）也其器ア名譽（めいよ）
有し。イチメの傳（つら）もかくも多々小公中（こうちゆう）をひそせ一朝生のる
を恩（おん）成（こな）志（こころ）ぐ。かくもかく。也けのひりまど家小冥加（めいが）道に
あづくも不直のする事もあらず。美不^{（めいふ）}心^{（しん）}氣^{（き）}乃懲^{（うなが）}小公
主^{（しゆ）}成^{（せい）}志^{（こころ）}。化人^{（けじん）}もよし。汝^{（な}れす殊の者^{（こと）}も如^{（ごとく）}く小公
主^{（しゆ）}の正^{（まさ）}事^{（こと）}也^{（や）}。と云^{（い）}統秋^{（とうしゅう）}之^{（の）}教訓^{（きょうくん）}も繪^{（ゑ）}を事^{（こと）}之
一筆の名匠小近に喜定と云^{（い）}り。近古の名作あり京より近
きく傳^{（つら）}ひゆき。優劣（ゆうりょ）をもば

にア作の筆を持^{（も）}ふ人ハ稀^{（まれ）}なり。近古より數代ある
中少^{（すくな）}のア喜定最上あり。近に小近^{（ちかに}）長門名作あり
長門の作ハ近にア多^{（多く）}しと云^{（い）}。後より人のいへり。且つも
ト云^{（い）}りて近に喜定よりも大小^{（おほちい）}持^{（も）}り。余多く乃^{（おの）}小ハ何
もく持^{（も）}り。優劣（ゆうりょ）をもば

一筆も志^{（し）}意^{（い）}の本^{（もと）}の作が最上とも。末筆の作ア中少^{（すくな）}二
帝^{（あひ）}と云^{（い）}。筆跡小名物（めいぶつ）

一禁^{（きみ）}花^{（はな）}繪^{（ゑ）}と^{（と）}金^{（かな）}の柄^{（えい）}竹^{（たけ）}を造^{（つくり）}。多^{（多く）}金^{（かな）}を付^{（つき）}高^{（たか）}陣^{（ぢん）}、
繪^{（ゑ）}を入^{（い）}と^{（と）}も^{（ま）}時^{（とき）}。多^{（多く）}金^{（かな）}を一放^{（ひき）}。さかして。多^{（多く）}勢^{（ぜい）}の小
糸^{（いと）}と^{（と）}繪^{（ゑ）}のそれ。味方^{（みがた）}小石^{（いし）}信^{（しん）}ア勢^{（ぜい）}を以^{（もつ）}て。又紙^{（いし）}を

ぬをかゝる一放ノれ事統の作也す。又鑑小不付トテ
竹子く多統を作乃法也。明乃金幼致ハ縁もと人
皆は墨子く大小利を以テ之ア金幼致ハ永樂年間の人小
北征紀とシ著述也。歷代小史小此北征紀を載す。又經
國雄略小リ是多の墨物アリ成載ス

一 宣政甲寅春三月八日佐勢重津領至水村飯ほ村乃邊ナリ
木ノ多く大木麻特を有シ。次第小西木特イリ。佐賀太和
ア玉界太良生村石谷原村迄ニ及ス。全間七八里ナリ十里小及
角ふ特ナリ。三四日アリ。毎日狩リ。一ふ。巴知山。四耳の鹿
を獲ス。四年アリ。鹿も多稀の物ナリ。土佐是成常康と
號ス。其の歴史。

名付テ神物アリ。獵入も歩きアリ。山鹿四耳トモア
有。車一アリ。常康の廉トリ。意。大。小。一。アリ。奇
怪の歴史。

一 宣政甲寅の春修繕中道後温泉の傍小畠。古昔より
士民の往く不淨を忌む。以て畠を穢モトシハ忽ち崇とば
シ。寒熱を覺セ。七年松山の王集乃考。之。母土守。以聖德
太ふ。温泉の碑。立。人。而。之。果。大。有。碑石を掘出アリ。はれども。之。今。之。前。水
多く洗ひ。而。之。不。聖。體。を。有。之。温泉。不。空
キ。時ア脚文。章。多。時。小。隨。往。の。人。乃。姓。名。を。載。ス。稀

まじめ
代乃珍物たりて怪い坂アヤシミ。ふ温泉のアツモリ邊アマガタ古地コトコト
塙穿アカハラフの急アツふ。温泉のはれ湯アツモリノハレヨウ。街シテの人ヒト多く
タタ温泉アツモリ小コトコトあアマガタ。時ハ一里イチリの人民ヒンジン數カウ百人ヒジク錢セン渴カクす。かよぶ
やヤ。碍アマガタ車カマツ無アム事モノ。止ハシム。往ハシム。
義ギ也ヤ。又アフ多アマ少アマ小埋アマヒタツ。アマヒタツ多アマヒタツ事モノ。と
仰アマガタ人のヒト語ハシム。

一庵禪玉小坡村谷川乃傳小井河里水苔赤色
五味丸頭りうが。是小活ノノ病を治モ但
新丸温熱ノ活也。本丸也。

一大坂乃士山寺何某とひよ人五歳。安永甲午年十月晦日

其田山の邊發^{トガ}。年々^{クミナス}行^キ喧^ク人の影^シ。春^{マツ}
やる故^{タカ}。ゆきうり下れと^リ。うろ小人^{タチ}。さくら又^{シテ}人^ヒ
着^シ。寫^シ。又^{シテ}ゆきうり下れと^リ。人^ヒ。かたもとと數度^{シテ}見^シい
うすとて不^シ識^シ。うを追^シふ。口^{アハ}ふ。また^{シテ}絆^モも渴^シ。^モ
えみ鐵^キ扇^{タマ}。町^{ハシ}。天蓋^{カバ}を上^シふ。ぬだりけ^シ。虚^{ムカシ}僧^{サムライ}と
同道^{シテ}。物語^シ。ある。いは。虚^{ムカシ}僧^{サムライ}の顔^{シテ}を忍^シふ。塵^モが
ゆく。作^シたる顔^{シテ}。不^思議^シ。山寺氏^{ハシ}。山^{ハシ}。虛^{ムカシ}僧^{サムライ}。妖怪^{ヤクザイ}。^{シテ}
尋^シ頻^{アリ}。山寺氏^{ハシ}。山^{ハシ}。虛^{ムカシ}僧^{サムライ}。妖怪^{ヤクザイ}。^{シテ}
太刀^{タケ}。み切^{シテ}。まをと^シ。木^キ。山^{ハシ}。太刀^{タケ}。抱^キ。木^キ
あとあく^シ。まとと^シ。山^{ハシ}。木^キ。



身を押へてそれだ。彼町人たり。何者とて因ふ。抑へ思ひたる
なり。且つまゝ因をりし事なし。虚無僧もあらず。模のうろと
は死ある間とて、消失ものぬ。つややか惡ろしもふな付
すかせしむりと。何幸と語り合ふ事あらず。といた。我ハ遠く
乃有す。尚地の案内がち。ば旅高も。翁也町ハ何所ぞ。中
山。故。甚善とさひを聞ふ。経りゆきを業仕り。今
翁也は宿近とせり。語り合ふ事。おもひかずり。
山寺氏ア氣好怪小徹。一。逃走し。す。翁也
一紙。翁也上品の焼酎成ぬ。大をともせ。また火燃。主。紙
燭。恙。ア。小火。ア。戯ふ。主。事。ア。翁也
身を上に字に經る。す。翁也

一淮南子曰。乞火不若取燧。寄汲不若鑿井。世間学問。乃。ある
ぞ。何事も人ふ寄。幸く幸成。成就。ア。入人を。學。問。似
く功を立人と。因。加。助。ア。人余。猪。幸く幸成。あ。ナ。代。ハ
ト。ル。か。も。い。き。只。我。を。勧。先。ア。多。ふ。ま。く。求。も。は。あ。つ。何
よ。も。成就。し。人。も。我。成。多。ア。教。ぶ。サ。ふ。か。る。も。の。ナ。う
一淮南子曰。古琴五絃至周。有上伊則爲七絃云。今乃絃瑟
等の第十一絃を止と名づけ。第十二絃代序と名づけ。第十三
絃を中と名づく。名義解しがく。諸家の説。絶く。止
伊ハ淮南子小アえ。上伊ハア。止の字淮南子小一畫を
あく。上に字に經る。す。翁也

一降真香ハ雷トナの主ありと云ふ。又雷ムシルノオノモトカラ
シテシム者ニ。降真香にて薰ガシレモ蘇生トシモ通シテシム者經
除たまリ。今せうふ降真香トシテモハ此マ麻吉トシム物
ヨリ降真香小ハナレバ。余前年亂色乃降真香を取テリ。是
真物ありと考シ。いはく實ふ美物なりやも。後後
方を尋ね求ミ。ども真あるゆ。乃

一河内國安國天皇乃陵代物也。其中「玉碗」玉碗と云西琳寺の什物と侍。余先奉是残アリ。二
合许も入る重死碗あり。假水精り潔白ある。又「硝子玉」硝子玉潔白。真の水精アリ。又「真」真の水精アリ。蛇四十五年

辨財天御色玉小く新タツ造り。彷彿物也。日本之く器物
小もて。又「玉」玉近年のみなり。唐云かくもり。中
にくるりと而色の硝子玉ハ造り。其名安國天皇
乃時云既に硝子玉ある。もしく不審ある事か。西域
小通船「アラカ」アラカ舶東の物也。又「日幸」日幸良工。又「良工」良工
を以て送り。然もても時代乎古今無れ事を知。翁
人物のたゞ古今用し。智惠情欲も用し。古ル今ル如し
一論衡曰周成王時倭人獻錫。とり文也。又「往古」往古より。故小
乃通舟ハ五ノ十丈也。

一論衡曰漢建初五年湖水去泉陵城七里水上聚石曰燕室

丘臨水有俠山其下巖澗水深不測二黃龍見長出十六丈身大於馬舉頭顧望狀如國中畫龍燕室丘民皆觀見之去龍可數十步又見狀如駒馬小大凡六山水遨戲陵上蓋二龍乏子也并二龍為八山移二時乃入云云

一漢士乃画家獨祿壽の國小陶朱公周文王南極老人岱用
也又蠅蠅鹿龜の三物を画く。又三白乃固とりよそと
いふ。多く雪中河辺路鳥戎画く。又月霧海戎画く。一
一安永三年甲午五月廿七日より廿九日まで尼ヶ崎海中より小
た蟹黙々。登り浪華の川。兩岸皆蟹と成淀川をもし
て登り。余を以浪花伏見堀小修く。川辺ありしが。よしと

内乃水成汲小一掬の内小蟹數十枚有之蟹の大きさ豆より色ふく透明あり

一
同六月廿三日大風至。上乃風船。舟の系乃ど。し。大坂近づ。
乃海も大浪起り。瀬戸乃人數万とり。す。聖廿四日の安
年大坂町。中。小社言起り。津浪。其來り。大坂町。海。あ
と。言罵。男。女。老弱。大坂。逃。逃。或ハ全銀。を。携
一。飯。大。林。や。ど。く。ち。強。劫。り。許。あり。大坂。中。強。ど。如。此
よ。く。強。劫。す。町。奪。誰。い。い。ゆ。し。や。と。い。よ。も。あ。し。む
不。因。敵。乃。車。か。り。た。余ハ母。女。大。獲。家。ふ。在。ち。行。明。ひ。ふ。威
て。難。事。

一朝ハ諸道の坊よりハ曾我物語ふむる傳あり

一作勢山田の海中大風雨の後小舟あらず。ア子コ多とて
志大にて羽茂江と六十人通し。近年蓬萊の入無人
崎乃南海ふ吹流さむ。一ツの崎に宿付。其處より數里あり
候ふ又古佐より漂流の人ゆゑて舟を立づ。之幸うし
く毎事ゆ。ゆゆせし。彼島逗留の半日食ふ大威
をうつりく人を及す。人代思ひ。手捕ふも爲た物めぐ
多くゆく肉残食居。云々。南方ふ去く。ア子をも
喜。夏秋ノ。崎小舟。往。波よ絶る時ハ羽毛の色向く。海中く
ちくと見ハ羽毛色。變む。ア子の舟。五六合代入る。

利口。蓬萊人。卵を撃つ。ゆきとて。けむるア子
コ多

一武藏玉上野界。地。往来。街道。人踏免。書。所。所
ア。其。而。ア。人。之。怪。之。所。之。之。之。之。之。之。
里人。寄。金。之。塙。穿。て。試。し。か。や。が。て。金。石。之。如。之。之。之。
小塙。尚。見。ア。之。之。人。勢。集。之。塙。之。之。之。之。之。之。
而。之。之。里。人。入。房。入。之。人。之。之。之。之。之。之。
中。より。ち。の。之。人。の。事。之。而。而。之。之。之。之。之。
死。せ。を。下。し。と。て。皆。集。之。繩。袋。ア。之。之。之。之。
い。あ。す。み。と。る。み。何。も。あ。き。と。應。小。土。か。く。塙。金。石。

乃々々々小聲す。四方あく廣くまゝの音ふゝゝ、唯思うしゆやううじ
きもほせざざやへとつよみど。まゝも様く塙とくらべてかく廣く
塙たゞしみ大あゝ佛像の摸さぬふやうに土中に埋まつて
まね像の腰よ穴りゆく。里人佛像の腰中ふ焉に入らむせや
其大やうるをもし。左をひだと寄合へがふ物を塙ひさむ
官所ふ紹かむ。一村の騒動あらびし。山はくふ埋立せよま
左ふハ不如しく。件乃所ふハ重た板戸扇くがよじく埋
縫且うりして。畠中觀音方へ東山よりヤホリとて物が
なうた

やちもゝたちゝをもゝて
一休勢は八知村太角生村辺の山中ふホメキヒトヒツ竹
竹野里入

是成食。不爭。不怒。不喜。

一近たは京師より老男ふりて婦人の乳けを飲ふを好み
初産乃婦人の乳房堅く乳けを飲むを好む
け乃きが通じてより小より新産の婦人も皆此老人然よみた
て乳を吸ひむけを入日夜堵方よ招ふく乳けを飲む
他乃飲食せよと云。五難廻ふ攘城の人年二百四十歳化的の飲
食成所ドく唯乳汁乃く食用ノク仕健ぢりと京師乃老入
小長寿成はゆたも奇事ぢり

一阿波國勝瑞村八幡山より脇邊た所より余り
門人橘春庵住
居る地あり。今漢村定方村小綱とて女十五六
方の時。娶し

く男子と成る則名狀縁平とはむ縁平之年寛政六年甲寅三十四五才ち。壯矣長大乃男也。妻成也。具せり。春莽常々アラ所なり。

一寛政甲寅妻儀中重檜物至り。女よねとりてハ一夜登熟して
變り。男子とかふ年十七八才ち。松の胸とほ名し。ちを
京都の人牛山克倫おも子儀仲小豆卫門と。物語あり。

北窓瑣談卷之四

